

展示感想

## ギャラリートーク—軍事郵便展において

鈴木 慎哉

平成24年8月1日から31日にかけて、通信総合博物館で企画展「軍事郵便展—戦地からの便り」が開催されました。私は、その期間中の14日から18日までの5日間、学芸員実習を行いました。そして、その中の17日と18日の2日間はギャラリートークを、通信総合博物館にて展示されている軍事郵便を用いて行いました。その際には、常設展の軍事郵便だけでなく、企画展の軍事郵便も用いてギャラリートークを行いました。私の専門にしている研究分野は日本近世史ですが、企画展を担当された新井勝紘専修大学文学部教授（郵政歴史文化研究会第二分科会）の専修大学の大学院ゼミナールを受講しています。そのゼミナールの中で、日露戦争期の軍事郵便（田嶋房邦氏書簡）の解説を行っており、軍事郵便の予備知識が多少ありました。そこで、「軍事郵便」をギャラリートークのテーマに選びました。

企画展では、貴重な軍事郵便が多数展示されていました。中には、絵入りの軍事郵便や、検閲を受け墨で文面の一部が黒く塗りつぶされた軍事郵便が展示されていました。ひとつひとつの手紙からは、兵士としてだけではなく、愛する人を想う一人の男や一人の父、一人の子としての、戦地からの声・想いがうかがえました。同時に、新井教授が指導されている、専修大学学部ゼミナールの学生によるポスターセッションも展示されていました。これは、ゼミ内のグループワークとして取り組んだ軍事郵便の解説・調査の成果であり、説明文がわかりやすく、「軍事郵便」を知らない人たちにもやさしいものだったと感じました。

また、同時期に夏休みのファミリーイベントで「科学捜査展」も通信総合博物館では催されていたこともあり、中学生以下の来館者が多くみられました。そのため、軍事郵便というテーマは小学生や中学生には難しいであろうことから、絵やクイズを取り入れた紙芝居形式のギャラリートークを行いました。常設展の軍事郵便のコーナーと企画展の会場が多少離れていたため、常設展でのギャラリートークがメインとなりましたが、企画展でも見学者がいれば移動してギャラリートークを行いました。

企画展は、小学生以下の子どもが熱心に見ていた印象はあまりなく、見学していた年齢層としては40代、50代以上が多かったです。夏休みということもあり、家族連れの来館者が多かったです。同時開催中の「科学捜査展」のイベントが始まるまでの、空いた時間を利用して常設展の見学している方が多く、軍事郵便に興味を持って見学しているという方は少なかったように思われました。ただ、常設展や企画展の軍事郵便を見学していた人は、ケース内に展示されている軍事郵便を一つ一つじっくりと見ていました。

ギャラリートークでは、企画展に展示された軍事郵便には文面の一部が黒く塗りつぶされているものがあり、その理由が「軍として知られたくない情報を、検閲の際に塗りつぶされた」ためであることの解説をしました。消された文面の中には軍内の食事内容ではないかと推測できるものもあり、それは、食べたものから兵士たちの貧しい栄養状況が知られてしまうからだという説明をし、観覧者に納得してもらうことができました。

内地へあてた軍事郵便では、写真も同封されたものがあり、カメラマンも同行していたこと

も解説をしました。また、絵入りの軍事郵便については、絵師が同行していた場合もあり、現地の絵を描いてもらっていたことも説明をしました。その補足として、軍事郵便にはハガキや封書だけでなく、小包もあったことを説明をしました。どのようなものが小包の中に入っていたのかという質問には、内地から、絵の道具を送ってもらっていたり、カンヅメが送られてきたりした「ようである」ことを、「ただ、それを証明するものは残っていない」ことも合わせて解説をしました。また、小包が送られていたこと自体は明らかであるということも付け加えました。戦地に小包が送られていたことは、常設展の軍事郵便と同じケース内に展示されているポスターからもうかがえます。そこには、生ものを入れることは禁止であることや決められた大きさ、住所の書き方などの注意点が細かく書かれています。

また、『郵政資料館研究紀要 第3号』（郵政歴史文化研究会編、日本郵政株式会社郵政資料館発行、2011年）所収の後藤康行氏の研究ノート「戦時下の漫画にみる通信事業と戦争—郵政資料館所蔵雑誌『通信の知識』および『大通信』掲載漫画の研究—」では、「生もの禁止など小包を送る上での注意点を紹介」した漫画が紹介されていました。さらに自分で調べてみたところ、この小包は軍事郵便小包といい、内地に送られるものは公用便のみ許可されていたことがわかりました。軍事郵便小包の展示も軍事郵便展で行えることができたなら、新しい発見ができるのではと思いました。

「軍事郵便」というテーマは子どもたちには難しく、内容も興味をもちにくいものかもしれません。しかし、軍事郵便には、戦地から内地へ向けた声や、内地から戦地へ向けた声が、書かれた当時のまま文字として残っている貴重な史料です。もうすぐ戦後70年。戦争を体験した世代がごくわずかとなっていくなか、軍事郵便の保存と調査は、これからさらに求められるのではないかと、今回の企画展、ギャラリートークを通じて感じました。

（すずき しんや 専修大学大学院 文学研究科 歴史学専攻 修士課程）